

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	岩橋 嘉大
2. 審査委員	主 査：連大教授（兵庫教育大学）福田 喜彦 副主査：連大教授（兵庫教育大学）吉水 裕也 委 員：連大教授（上越教育大学）志村 喬 委 員：連大教授（鳴門教育大学）梅津 正美 委 員：連大教授（岡山大学）山田 秀和
3. 論文題目	中等社会系教科における未来洞察型授業の開発研究
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻社会系教育連合講座 岩橋 嘉大 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査 日時：令和7年1月26日（日） 16時～17時 場所：Zoomによるオンライン開催 1. 学位論文の構成と概要 序 章 本研究の目的と方法 第Ⅰ部 中等社会系教科における未来洞察型授業理論の構築 第Ⅰ章 社会系教科における未来洞察型授業理論の現状と課題 第Ⅱ章 未来学研究による未来洞察の変遷と特質 第Ⅲ章 中等社会系教科における未来洞察型授業の認識論 第Ⅳ章 中等社会系教科における未来洞察型授業理論の類型化 第Ⅱ部 中等社会系教科における未来洞察型授業理論の展開 第Ⅴ章 個人・構想型未来洞察授業の開発と実践 第Ⅵ章 社会・構想型未来洞察授業の開発と実践 第Ⅶ章 個人・行動型未来洞察授業の開発と実践 第Ⅷ章 社会・行動型未来洞察授業の開発と実践 終 章 本研究の成果と課題 学位論文の概要は、以下の通りである。 本研究では、未来学の研究基盤を踏まえて中等教育における未来洞察型授業理論を構築し、オルタナティブな未来を構想する資質・能力を育成する授業開発及び実践を行っている。 本論は、第Ⅰ部の「中等社会系教科における未来洞察型授業理論の構築」と第Ⅱ部の「中等社会系教科における未来洞察型授業理論の展開」で構成されている。第Ⅰ部は4章で構成されている。 第Ⅰ章では、未来洞察型授業理論の発展経緯を概観し、日本の社会科教育や国際理解教育の文脈で

論じられてきた未来予測や未来洞察の理論とその実践の変遷を示している。一方、課題として未来洞察が基盤とする認識論、方法論、未来イメージへの原理的な検討がなされていないことを指摘し、中等教育における未来学の成果を踏まえた理論の類型化が必要となることを主張している。

第Ⅱ章では、未来洞察が提案されるようになった未来学の歴史を概観し、その目的や方法論について主たる論者の議論を整理したうえで、未来学の方法論を整理している。

第Ⅲ章では、未来学の認識論として科学哲学分野における批判的实在論の議論を踏まえ、社会科学におけるメカニズムに関する知識の重要性を主張し、アブダクション、リトロダクションの推論様式を説明したうえで未来洞察における批判的实在論による説明がもたらす含意を提示している。

第Ⅳ章では、第Ⅱ章、第Ⅲ章での未来学の分析、批判的实在論の議論を踏まえ、1990年代のヒックスが展開した未来教育を分析的に考察したうえで今後の展望をもとに未来洞察型授業理論の類型化を図っている。それによって、第Ⅰ章で指摘したヒックスと未来学とのリンケージを明らかにし、ヒックスが展開した未来教育が過去・現在・未来の時間的枠組みにおいて未来イメージを働かせてオルタナティブな価値観や未来を構想する未来洞察の視点が中核にあることを主張している。また、主体性の育成や批判的实在論を基盤とした構想学習の重要性を指摘したうえでオルタナティブな未来の構想を図る方法論をもとに、①個人・構想型、②社会・構想型、③個人・行動型、④社会・行動型の4つの未来洞察型授業理論の類型を提案している。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で提示された未来洞察型学習の類型に基づいた授業理論をもとに、中等社会系教科の地理科・歴史科・公民科で授業開発及び実践を行っている。各類型と授業開発・実践との対応については、①個人・構想型、②社会・構想型、③個人・行動型、④社会・行動型で各1つの授業開発及び実践を提示しており、第Ⅱ部は4章で構成されている。

第Ⅴ章では、David Hicksが提案した「5つのfutures skills」を基軸として個人・構想型未来洞察授業による授業開発及び実践を提示している。個人・構想型未来洞察では、「私」を主体として批判的・創造的思考を働かせて「望ましい未来」を構想する力の育成を目指している。高等学校「歴史総合」の大項目C「国際秩序の変容と大衆化と私たち」の単元においてヒックスやスローターの理論をもとに批判型未来洞察のアプローチを単元構成の原理として位置づけた歴史学習を提案している。

第Ⅵ章では、「域内経済システム」の視点に着目して社会・構想型未来洞察による授業開発及び実践を提示している。社会・構想型未来洞察では、「域内経済システム」の視点に着目して民族や文化、歴史を踏まえて主体を個人（私）から社会（私たち）へと拡張し、批判的・創造的思考を働かせて「望ましい未来」を構想する高等学校「歴史総合」における「グローバル化」の授業開発及び実践を示している。

第Ⅶ章では、ボールディング（Elise Boulding）が提案したバックキャスティングの手法を活用して個人・行動型未来洞察による高等学校「地理総合」の授業開発及び実践を提示している。個人・行動型未来洞察のアプローチでは、個人（私）を起点として望ましい未来及びその実現に必要な行動を構想し、社会参画意識を醸成する類型である。本類型の目標を達成するために生徒の生活圏の課題を調査するとともに、課題解決が実現した未来を描き、ボールディングのバックキャスティングの手法を活用して「責任ある行動」の明確化を図り、構想へとつなげる授業開発及び実践を示している。

第Ⅷ章では、ソハイル（Sohail Inayatullah）の6本柱のアプローチを基軸として社会・行動型未来洞察による高等学校「公共」の授業開発及び実践を行っている。社会・行動型未来洞察では、6本柱のアプローチを指導方略とした未来洞察によって人口減少社会への認識の再構築を図り、「私たち」を主体として「望ましい未来」の実現に必要な「責任ある行動」を構想する授業単元「人口減少社会の主体となる私たち」の開発及び実践を示している。

これまで論じてきた第一部や第二部での論証を踏まえて、最後に、終章では、本研究の成果と課題をまとめている。

2. 審査経過

本審査委員会の審査委員は、提出された学位論文を精読したのち、令和7年1月26日にZoomによるオンラインで公聴会を実施した。そのあと公聴会に引き続き、審査委員により、同じくZoomによるオンラインで、学位論文の審査と最終試験を行った。

（1）論文の独創性

本研究の独創性は、未来学の変遷を概観することで未来学と未来洞察の連関を明らかにし、未来学の目的論、認識論、内容論を踏まえ、批判的实在論が未来学の認識論として妥当であることを論証したことである。第Ⅰ章では未来洞察型授業理論の課題を踏まえ、第Ⅱ章で論じた未来学の変遷を概観し、「単数形の未来」から「複数形の未来」、そして脱欧米型の多元的な世界観へと未来学の視点は変化してきたことを明らかにした。また、未来学の目的は未来を可能性の領域として捉え、未来において複数の選択肢を構想し、人々がどのような未来イメージを持ち、行動へと結びつけるのかを研究することであると指摘した。それによって、社会という開放システムを対象とした

経験や現象のドメインにおいては、正確な未来予測は不可能であるが、多層的なメカニズムが複雑に相互関連する実在のドメインを捉えることで未来においてどのようなことが起こりうる可能性があるのかを考察・構想する未来洞察が可能となった。このように本研究は、未来学の変遷を概観することで未来学と未来洞察の連関を明らかにし、未来学の目的論、認識論、内容論を踏まえ、経験、現象、実在の3つのドメインを認識する批判的实在論が未来学の認識論として妥当であることを論証したことが独創性のあるものとして評価された。

(2) 本研究の発展性

本研究の発展性は、未来学の研究成果を視点として未来洞察型授業理論の類型化を図り、中等教育における未来洞察の発達プロセスを明らかにしたことである。これらの類型化は、第Ⅰ章で現代における未来洞察の研究動向を分析し、その源流を国家の政策や経営戦略、未来学に整理したうえで第Ⅳ章にて未来洞察型授業理論に分析的考察を加え、類型化への視座を示した。具体的には、ヒックスが未来教育を提案した1990年代に着目し、未来洞察型授業理論の理論的根拠及び授業計画を検討し、未来学者の理論的な影響が見られることを提示した。そして、1990年代にヒックスが展開した未来教育は過去・現在・未来の時間的枠組みにおいて未来イメージを働かせてオルタナティブな価値観や未来を構想する未来洞察の視点が中核にあり、希望への焦点化が図られていくプロセスとなっていたことを明らかにした。これによって未来洞察型授業理論と未来学とのリンケージが明確となり、第Ⅱ章の未来学の研究成果である①Richard Slaughterによる批判型未来洞察、②Sohail Inayatullahによる解釈型未来洞察、③Elise Bouldingによる参加型未来洞察及び第Ⅲ章で示した批判的实在論を踏まえることで、「望ましい未来」の構想から「責任ある行動」の明確化へと向かう未来洞察の段階の軸と個人（私）から社会（私たち）へと展開する構想主体の軸で体系化を図り、①個人・構想型、②社会・構想型、③個人・行動型、④社会・行動型の4つの未来洞察型授業理論の類型を導出した。このように本研究は、未来洞察型授業理論に影響を与える未来学の成果を包括的に組むこんだ授業理論を提案し、中等教育における未来洞察型授業理論の授業開発実践研究への基盤を構築したことが発展性のあるものとして評価された。

(3) 学校教育実践への貢献

本研究の学校教育実践への貢献は、中等教育における未来洞察型授業理論の類型に対応した未来洞察型授業の開発及び実践を提示したことである。第Ⅴ章では、①個人・構想型未来洞察の授業として、ヒックスが提案した「5つの futures skills」を基軸とする高等学校「歴史総合」の授業単元「平和な国際秩序を形成する大衆社会をめざして」の授業開発及び実践を提示した。第Ⅵ章では、②社会・構想型未来洞察の授業として「域内経済システム」の視点に着目した「歴史総合」の授業単元「『グローバル化』の進展によるアジア間貿易、東アジアの奇跡」を提案した。第Ⅶ章では、③個人・行動型未来洞察の授業としてボールディングのバックキャストिंगの手法を活用した「地理総合」の授業単元「課題が解決した地域の未来を構想する」を提案した。第Ⅷ章では、ソハイルの6本柱のアプローチを基軸として社会・行動型未来洞察による高等学校「公共」における授業単元「人口減少社会の主体となる私たち」の授業開発及び実践を提示した。このように本研究は、未来学の研究成果を視点として、①個人・構想型、②社会・構想型、③個人・行動型、④社会・行動型の4つの未来洞察型授業理論の類型を開発し、中等教育における未来洞察型授業理論の精緻化を図ることで未来洞察の発達プロセスを提示したことが学校教育実践への貢献があるものとして評価された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、岩橋 嘉大 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。